の銘板から読み取れます。＜私たちは世界の 500 社に入ることはできないが、500 年続く企業になる＞という部分が中国企業の性格を表しています。

【長春の感想】

長春は、日本による満州経営の中心地にして、日本軍部の影響が極めて大きかった土地。満州建国時点から当時のソ連は満州の仮想敵国であり、ロシア文化が根付く要因はないため、私たちが眼にするロシア遺産は皆無でした。

【今回のツアーを総括して】

満鉄が走っていたハルビンから大連までの幹線を今、高速鉄道がハルビン－長春をわずか 1 時間で繋いでいます。そんな距離にも関わらず、両都市の性格は全く違い、個性に乏しい中国都市という私個人のイメージを見事に覆してくれました。

ハルビンの街にロシア人の姿はほとんどなく、ロシア人の作ったハルビンの街は今や完全に中国の街となりました。逆に言えば、ロシア人の作る文化、経済は外地においては根付くことが難しく、ロシア以外の土地で繁栄している姿を見ることはありません。

一方、中国人は中国外において活発な活動を行い、各地に中華街を作り、まさにチャイナワールドの実現を競い合います。この中国人とロシア人のバイタリティーの差が、中国人をして「ロシア何するものぞ」という姿勢を作り出していると感じます。満鉄の名物列車「あじあ号」の食堂車ではロシア人ウエイトレスが売りでしたが、ハルビンにおいてもロシア人のステータスは決して高いものではなかったようです。外地におけるロシア人の生活遺産を見ることで、ロシア人の精神構造というものがちょっとわかる気がしました。ただ、一概にロシア人といっても白系ロシア人と言われる社会主義ソ連と敵対して逃げてきた人々、そのかなりの部分がロシア系ユダヤ人だったというような複雑な問題もあり、ハルビンを通してロシアを見るというスタンスの有効性は続きます。

第 2 回国際会議「ロシアと日本：持続可能な発展への道」へ参加して

五十嵐　徳子（京都外国後大学教授）

2025 年 9 月 12 日、サンクトペテルブルグ経済大学のガスプロムホールで、第 2 回国際会議「ロシアと日本：持続可能な発展への道」が開催された。第 1 回は昨年 11 月 24 日に同大学の同ホールで開催された。日ロの学術・文化交流は、現在の厳しい状況下でも絶やしてはならないという故藤本和貴夫先生（大阪大学名誉教授、元大阪経済法科大学学長、大阪日本ロシア協会理事長）の強い意志のもと、サンクトペテルブルグ友好の家と同大学の協力を得て本会議が実現した。実は、藤本先生は第 1 回会議に日本側団長として参加する予定だった。しかし、昨年 10 月に駅で転倒し、怪我を負われた。それでも先生は、最後まで参加への強い意欲を示し、「主治医にはまだ言っていないが、無理をしてでもペテルブルグの会議に出席したい」と語っていた。私も先生が団長として同行してくださると信じていたが、残念ながら体調が回復せず、私たちだけで参加することとなった。

第 1 回会議終了後、ロシア側からは「来年は藤本先生にもぜひ参加してほしい」との温かい言葉をいただいた。そして、第 2 回会議が実現した。しかし、藤本先生は機能回復手術直後に脳梗塞を発症し、2025 年 4 月 22 日に逝去された。先生の葬儀には、サンクトペテルブルグ経済大学学長や友好の家の理事長から心温まる追悼文が寄せられた。会議の冒頭では、経済大学側が藤本先生の写真と紹介を掲示し、黙祷の時間を設けてくださった。今回の会議には、筆者を含む 4 人の日本人研究者とロシア側 5 人の研究者が多様なテーマで報告を行い、活発かつ真摯な議論が交わされた。その中で、会場の大画面に映し出された藤本先生の写真を見たとき、先生が本当に亡くなられたことを初めて実感した。藤本先生のイニシアチブがなければ、この会議は存在しなかっただろう。困難な状況下でも交流の大切さを改めて噛みしめながら、この報告文を書いている。